

3. 平成 31 年に特に注意を要する病害虫

道総研 中央農業試験場 病虫部 予察診断グループ

1. はじめに

北海道病害虫防除所、道総研各農業試験場、および道農政部技術普及課等で実施した病害虫発生予察事業ならびに試験研究の結果から平成 31 年に特に注意すべき病害虫について報告する。

2. 平成 30 年の病害虫の発生状況

平成 30 年は 6 月中旬から 7 月上旬の多雨により、小麦の赤かび病、たまねぎの軟腐病が多発した。この時期の多雨により、水稻のいもち病、ばれいしょの疫病およびてんさいの褐斑病の早発あるいは多発が懸念されたが、7 月中旬以降の少雨傾向などにより、少発生にとどまった。りんごの黒星病は、上記の多雨に加え、8 月にも好適条件が見られたことから多発した。一方、害虫は多雨傾向により加害活動や産卵等が抑えられたことにより、多くが少発生となった。

主要病害虫で多発となったのは、小麦の赤かび病、たまねぎの軟腐病、りんごの黒星病および腐らん病であった。やや多発となったものは、水稻のイネミギワバエ、小豆の落葉病、ばれいしょの軟腐病、りんごの斑点落葉病であった（表 1）。秋まき小麦のなまぐさ黒穂病は本年も全道で発生が認められたが、発生・被害面積は前年よりも減少した。

表 1 平成 30 年に多発・やや多発した主要病害虫

作物名	病害虫名
水稻	イネミギワバエ
秋まき小麦	<u>赤かび病</u>
春まき小麦	<u>赤かび病</u>
春まき小麦 (初冬まき)	<u>赤かび病</u>
小豆	落葉病
ばれいしょ	軟腐病
たまねぎ	<u>軟腐病</u>
りんご	<u>黒星病</u> 、 <u>斑点落葉病</u> 、 <u>腐らん病</u>

下線は多発生となった病害虫を示す

3. 平成 31 年に特に注意を要する病害虫

(1) りんごの黒星病

黒星病は葉だけでなく、果実にも病斑を形成するため、著しい収量減の要因となる。近年の多発傾向を受け、平成 30 年度に注意を要する病害虫として、また、4 月 11 日には注意報を発表して注意喚起を行ったが、平成 30 年も多発した。

本病は平均気温が 15～20℃で多雨のときに多発しやすい。平成 30 年は 6 月中旬からの多雨や 8 月の低温多雨により発生に好適な条件となった。病原菌は落葉や果実、枝にできた病斑上で越冬するため、平成 31 年においても感染源は多いと推測されるため、防除時期を逸しないように薬剤を散布する。加えて、近年夏季の多雨傾向が続いていることから、重点期の防除はもちろん、それ以降も降雨前に薬剤を散布する。散布間隔の開きすぎや散布水量の不足した園地、防除機の切り返し地点など、防除が不十分な場所で発生が目立つことから、薬剤散布においては適切な水量を遵守し丁寧に散布する。

平成 30 年は、道外複数の産地において地域外から導入した苗で黒星病が多発した事例が報告されている。新規に苗を導入する際には、その後の発病状況をよく観察するとともに、苗木であっても他の樹と同様に防除を実施する。

また、青森県では、DMI 剤および QoI 剤に対する耐性菌の出現が確認されている。道内における DMI 剤に対する感受性低下事例は確認されていないものの、本系統も含め同一系統薬剤の連用は避ける。

(2) りんごの腐らん病

腐らん病はりんごの最重要病害であり、主幹、主枝および枝梢部に発生して胴枯れ、枝枯れ症状を引き起こす。冬期間を除くほぼ通年、樹皮に形成された子のう殻や分生子殻（柄子殻）から胞子が分散する。このため、りんご栽培期間全体にわたって本病に対する警戒が必要である。

本病は多くの園地で発生がみられ、これまでも注意喚起を行ってきたが、平成 30 年には発生面積率 83.0%、被害面積率 28.1%と多発した。そのため、平成 31 年においても、感染源の多い状況が続くと予想される。また、本病においては、樹勢が低下することにより被害を受けやすくなる。平成 30 年は 7 月に台風から変わった低気圧、9 月に台風 21 号が北海道周辺を通過しており、損傷を受けた樹もあると推察されるため、注意が必要である。

本病の対策としては樹勢を維持することが最も重要であるため、「りんご腐らん病総合防除対策指針」に基づき、適切な剪定、施肥、土壌管理、干害防止のための草生管理、適正な着果量の確保など、基本管理を徹底する。また、伝染源を除去するために、園地をよく観察し、病斑を見つけ次第速やかに病枝の切り落としや病患部の削り取りを行う。切り取った枝や削り取った樹皮も園内に放置すると感染源となるため、必ず園外に持ち出して適正に処分する。削り取り部の他、せん定、摘果などによる傷も感染口となるので、ゆ合剤を塗布するとともに薬剤の枝幹散布も行い、本病に感染しないよう管理する。また、収穫後の休眠期防除も実施する。

4. 平成 30 年に新たに発生を認めた病害虫

平成 30 年に新たに発生を認めた病害虫は 12 (病害 9、害虫 3) である。一部を抜粋して紹介する。

(1) トルコギョウのべと病 (新称・国内新発生)

株が黄化し、葉に灰色のかびが密生する。被害が進むと、葉の奇形や茎の曲がりも発生する。詳細は、平成 30 年度病害虫発生予察情報第 12 号 (特殊報第 1 号) を参照のこと。

(2) たまねぎの黒腐菌核病 (新発生)

生育不良や立ち枯れ症状を引き起こしたたまねぎの鱗茎に、0.5mm 程度の菌核が形成される。低温で発生しやすい病害であるため、道内では春

植えの時期に早期に立ち枯れ等を引き起こしたと考えられる。貯蔵中に発生することも知られているが、道内では今のところ貯蔵中の発生は認められていない。

(3) カーランツのブドウワタカイガラムシ (新発生)

茎上に綿状の卵のうを伴うカイガラムシの成虫が認められた。高密度に寄生した場合には雌成虫と卵のうで枝の一部が覆われるような状態になった。また、寄生部には、アリの随伴も確認された。本種は広食性であるため、りんごなどのバラ科果樹やぶどうにおいても今後注意が必要である。

(4) 小麦のなまぐさ黒穂病 (病原の追加)

近年北海道内で発生しているなまぐさ黒穂病菌を同定したところ、小麦ではこれまで報告のなかった *Tilletia controversa* であった。本菌は土壌伝染することが確認されている。

(5) てんさいの黄化病 (病名の変更・病原の変更)

近年北海道内で発生していたテンサイ西部萎黄病の病原ウイルスについて詳細を調べたところ、従来報告されていたウイルスとは異なるものであった。その結果、新たに病名として、テンサイ黄化病、病原ウイルス名として、Beet leaf yellowing virus (ビート黄葉ウイルス) がホクレン農総研より提案された。

特に注意を要する病害虫および新発生病害虫の詳細な情報については、北海道病害虫防除所のホームページに掲載していますので、そちらもご覧ください。